

---

# 砂時計

鈴夜 音猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

砂時計

### 【Nコード】

N4431U

### 【作者名】

鈴夜 音猫

### 【あらすじ】

大和国の闇市で孤児として育った少年。彼に襲いかかった運命の悪戯は、否応なく彼を戦いへと引きずり込んでいった

## 序章 はじまり

三年前

月のない夜。辺りはいつにも増して暗闇に包まれていた。

灯された灯籠の焰は所々消え、辛うじて残る明かりに照らされた白い壁には赤い飛沫が飛んでいる。そして鉄のような臭いが立ち込める回廊には、進むごとに折り重なった死体が転がっていた。

不気味な静寂が支配する中、広間の奥から男の唸り声が聞こえてくる。普段は磨き上げられているはずの金の玉座は赤く染まり、左目に眼帯をした血まみれの男が縋るように倒れていた。

「全く……しぶとい男だこと。そんなに玉座を離れたくないのかしら？」

クスクスと笑うのは深いスリットの入った着物に身を包んだ女。

艶やかな笑みを浮かべ、血濡れた刀を手にゆっくりと近付いてくる女に男は苦しげに言い放った。

「そなたに……渡すわけには……ぐあああ!!」

「お前に何が出来るというの？ 無力な王よ」

男の右足に刀を突き立て、ゆっくりと捻っていく。あまりの激痛に声にならない叫び声を上げる男を見下ろす女は、ふと何かに気付き口角を上げた。

「あら、やつぱりお前が隠し持っていたのね」

ニコリと笑った女は突き刺した刀を引き抜くと同時に、男の喉元を掻き切る。血飛沫を上げ絶命した男の眼帯を引き千切ると、その下から現れた男の左目は異様な輝きを放っていた。

「やつと見つけたわ」

顔に飛んだ血飛沫を拭おうともせず笑う女の顔を、取り出された玉が照らし出していた。

## 一章 出逢い

大和国の城下町。活気溢れる市場に一際名の知れた少年がいた。みすばらしいながらも、特徴的な燃えるような紅い髪と緋色の瞳を持つ彼の名は火司<sup>かし</sup>。大和国の闇市で孤児として育ち、三年前にこの市場の一角に小さな小屋で暮らしながら、何でも屋をしている15歳の少年である。

「頼むよ、あとちよつとでいいからさ！」

「そうは言ってもなあ……」

パンつと両手を合わせ頭を下げる火司に、若い店主は困り果てた様子で頭を掻く。火司の仕事は依頼主の代わりに買い物に行くと言うもので、彼に頼めば安く品物が手に入ることが売りであった。

しかしそれは商売をしている店主達からすればあまり気持ちの悪いものではない。それでも最終的に根負けしてしまうのは、火司の人柄と、彼らもまた彼によく依頼をするせいだろう。

「わーった、わーった。その言い値でいいよ」

苦笑いながらもどこか吹っ切れたような店主に、火司は二カツと笑う。

「助かるよ！　じゃ、また頼むな！」

お金を置いて品物を受け取るや否や走り出す火司を、店主は笑いながら見送った。

火司がこの市場で名を馳せるようになったのは二年程前のこと。度々、闇市から来る人攫いが市場に店を構える夫婦の一人娘に手を出したのがきっかけだった。

同時13歳。闇市から出て一年、やっと市場で仕事ができるようになっていた火司は、連れて行かれそうになる娘を放っては置けなかった。

「おっさん、離してやれよ」

誰もが皆、遠巻きに見る中進み出た火司を誰もが無謀だと思っていた。しかし彼は持ち前の身軽さであつという間に男達を伸してしまったのだ。

それからというもの、彼は一目置かれるようになり仕事の量も増えていったのだ。

今では市場を歩けばすれ違う人は皆、火司に笑顔を向ける。その一人一人に応えながら、ごった返す人並みを縫うように走り抜け、火司が細い路地へと身を滑らせたその時だった。

突然、市場の喧騒が消え、辺りが暗闇に包まれる。両側にあるはずの壁も、背後にあるはずの市場もなく、そこはただ静寂だけが支配していた。

「な、なんだ……？」

突然のことに困惑する火司の耳に、風を切るような音が聞こえ、彼は反射的に体を反らせた。すると、さっきまで彼の首があつたであろう辺りを鋭い刃のような風が行き過ぎていった。

「あら、残念　避けられちゃったあ」

「なっ……?!」

まるで残念がっていない口調でクスクスと笑いながら現れたのは1人の少女。火司より1、2コ程上だと思われる少女は、身の丈程の鎌を下ろし微笑んだ。

「ま、次は当てちゃうけどね」

「な……誰だよ、お前……」

「私は白恋<sup>はくれん</sup>。アナタを殺しに来たの」

楽しげに恐ろしいことを口にする少女に、火司はじりじりと後ずさった。しかし少女はそんな彼に対し笑顔のまま、距離を詰めてくる。

「朱音<sup>あかね</sup>様がね、アナタがいると計画に支障を来すかもしれないって仰るから。だったらさっさと始末すべきでしょう？」

淡々と語る白恋の表情は笑顔のまま。しかしその瞳は全く笑って

おらず、明らかな殺意が彼を射抜いた。

「心配しないで、一思いに殺してあげる。……痛くはしないわ」

スツと無表情になった白恋は大きな鎌を軽々と振り上げた。彼女の視線に、その場に縫い止められたように動けないでいる火司は、殺されることを覚悟した。しかし。

「きゃあっ!!」

突然、大量の水柱が白恋を襲う。寸で後ろに飛んで免れた白恋は、キツと水柱を睨み付けた。

まるで火司を守るように上がった水柱は、段々と小さくなり、何かの形へと変化していく。そして現れたのは、長い耳と尾を持つ、一匹の獣だった。

「お前は……!」

突然目の前に現れた邪魔者の姿に、白恋は一瞬怯む。しかしすぐに余裕を取り戻すと、諦めたように笑った。

「まあいいわ。お楽しみはまた今度……じゃあね」

あっさりと身を引いた白恋は颯爽と闇の中へと姿を消してしまった。それと同時に火司達を包む闇も消え去り、いつもの街並みと喧騒が戻ってくる。

「な……今のは一体……?」

「アイツは陽の者。言わば俺達の敵だ」

火司の呟きに答えた快活な声は、彼の頭上から降ってきた。慌てて視線を向けると、その声の持ち主は建物から張り出している細い鉄の棒に腰掛けていた。

「なっ……!!?」

「お前が火司だな。俺は土陣<sup>どじん</sup>、そいつは水歌<sup>すいか</sup>だ」

ニコツと人の良さそうな笑みを浮かべた土陣が言くと、火司の傍らにお座りの状態でいた獣がクウン、と鳴いた。しかしいろいろありすぎて思考が追いつかない火司を見ると、軽々と下りてきた土陣は苦笑いを浮かべた。

「聞きたいことは山ほどあるだろうが、少し待ってくれ。とりあえ

ず移動しよう」

水歌の頭を撫で、土陣は火司の返答も聞かずズンズンと先に行く。服の裾を水歌に軽く引かれ、火司はやっと足を動かした。

## 一章 出逢い（後書き）

書き方を若干変えてるので読み辛い部分もあるかもしれませんが、  
文字数を減らしたかった）

もし見辛い場合は戻そうと思います。感想、メッセージ等でご連絡  
いただけると助かります。

いつまで続くか分からない長編ですが、お付き合いいただけると嬉しい  
です！

## 二章 陰の者と陽の者

背に弓矢を背負い、短い髪に布を巻いている土陣と名乗った青年は、町からだいぶ離れた山中へと火司を案内した。水歌と呼ばれた犬ほどの大きさの獣は、火司の後ろから付き従っている。

「あの、どこまで行くんですか？」

周りにあるのは背の高い木々だけ。彼らが進むのは道のない道であり、火司の不安は大きくなるばかりだった。

「そろそろだ。ヤツらに見つからないようにしてるんでな」

山道を歩いていると言うのに、土陣の息は全く乱れていない。そのことに驚きながら、火司は彼の言葉に眉をひそめた。

「ヤツらつて、さっきの……」

「ああ。俺達は陽の者って呼んでる」

「よう……？」

意味が分からず首を傾げる火司に、土陣は快活そうに笑う。

「分からないことはあの方に聞けばいい」

「あの方？」

「俺達を集めた方、天一様だ」  
てんいつ

土陣の言葉とほぼ同時に目の前が開け、森の奥に佇む朱塗りの社が目に見え込んでくる。天から射し込む日の光に照らされた社に、迷うことなく入っていく土陣に続きながら、火司は違和感を感じていた。

しんと静まり返った社の中には人の気配はない。履き物を脱ぎ、奥へと進む土陣に続きながらも火司は周りをキョロキョロと見回すが、他に人の姿はないようだった。

彼らの進む母屋の廊下には、両端に閉ざされた襖があるだけ。柱に一定の感覚でかけられた蝋燭の灯りに導かれるままに進めば、廊下を抜けた先に細い回廊が見えてきた。

行く先は闇に覆われ伺い知れないが、不思議と恐怖感はない。先に行く土陣が歩を進めると共に備え付けられた灯籠が独りでに灯り、しばらく進むと大きな障子戸が見えてきた。

「ここだ」

土陣の言葉で触れてもいない障子戸が開く。中からひんやりとした風が吹いてきて、火司は思わず肩を震わせた。

中は洞窟のように岩肌が見え、その中央付近に天からの光が差し込んでいる。その光に照らされた石舞台の上には、一人の少女が静かに座っていた。

「お待ちいたしておりました、火司殿」

白い着物に白い羽織を着た少女の瞳は堅く閉ざされている。しかし何故だか火司は、少女の視線をひしひしと感じていた。

「妾は天一。ここに集まった陰の者達を取りまとめる役を与えられております」

「いん……」

また出てきた分からない単語に思わず呟くと、天一はにつこりと微笑む。

「この世界も、そこに存在する全てのものも皆等しく陰と陽、どちらかに属します。そして陰は月の属性を、陽は太陽の属性を持ち、この二つの均衡が保たれることで全ては成り立っているのです」

ゆっくりとした口調で語る天一の表情が一瞬曇る。

「しかし今、その均衡は崩れています。……朱雀<sup>すざく</sup>の守護を得た者によって」

「朱雀……？」

「この世界の均衡を保つべく、世界を創りし天帝が陰陽それぞれ六名ずつ、計十二名の天将を遣わしました。天将はそれぞれ一人ずつ人間に守護を与え、均衡を守っているのですが、その内の一人。朱雀の守護を得た者が、世界を我が物にせんと他の陽の天将より守護を受けし者達を集めているのです」

天一はそこで一旦言葉を切り、苦しげに眉を潜めた。

「彼は三年前、この大和国を治める天照王あまてらすを殺め、ある物を手に入れました」

「殺した……？ でも、そんな話は一度も……」

三年前と言えは火司が闇市から出て来た頃だ。自分自身もいろいろあったせいで、当時のことはよく覚えていてるが国を治める王が死んだなど聞いた覚えはまるでなかった。

「そりゃそうだろうな。ヤツは天照王を殺した後、実質的に実権を握った。もみ消すなんて簡単なことだ」

火司の言葉に、背後から土陣が答える。

「俺達はヤツらの目的を阻止するために集められた。しかし、この国を牛耳り、アレを手にしたヤツには容易に近付くことさえできない」

「アレって……天照王を殺して手に入れたって……？」

火司の言葉に天一が頷く。

「彼が奪った物は神器の一つ、全てを創り出す宝玉なのです」

「じんぎ……ほうぎよく……」

小さな声で繰り返す火司に、天一は微笑んだ。

「神器とは、この世界を守るための杭。一つは奪われた全てを創り出す宝玉、一つは全てを退ける鏡、一つは全てを壊す剣。この三つが揃えば世界を制することができると言われております」

一旦言葉を切った天一は、険しい表情で火司を見た。

「現在、鏡は天照王の妹君、月読姫様つくよみと共に行方知れず。そして火司殿、あなたに剣をお守りいただきたいのです」

「お、俺ですか?!」

突然の頼み事に火司は怖じ気付く。

「剣を手に行けるのは火の天将である陽の朱雀と陰の騰蛇とじだの守護を得た者。火司殿、あなたは陰の騰蛇の守護を得ただけなのです」

## 二章 陰の者と陽の者（後書き）

とりあえずここまでです

今回は説明が多く、申し訳ありません

次回はいつになるか分かりませんが、気長にお待ちいただけると嬉しいですよ！

### 三章 陽の砦（前書き）

今回は陽の方の話です

### 三章 陽の砦

白で統一された回廊は、不気味な程の静寂が満ちている。歩を進める毎に甲高い足音が響き渡る中、少女は前方に見えてきた大きな扉を迷わず押し開けた。

「あれ、戻ってきたんだ」

中へ入るなり聞こえてきた嘲りの言葉。それを発した顔の左半分を包帯で覆い隠した短髪の少年は、入ってきた彼女に侮蔑の笑みを向ける。

「よく戻ってこれたよね。朱音様に恥搔かせてさ」

「天陽、口が過ぎるぞ」

奥から靴音を響かせながらやって来た、長身で切れ長の瞳をした女が少年を諷める。その言葉に天陽と呼ばれた少年は、肩をすくめ押し黙った。

「白恋」

女の紫の瞳が入り口に佇む少女に注がれる。その冷たく射抜くような視線に、白恋は軽く目を逸らした。

「朱音様が話があると。入りなさい」

「……」

女の言葉に白恋は黙ったまま足を踏み出した。奥へと進み出した彼女の後に、二人も続いて歩き出す。

広間の奥、天井から下がる薄い布に囲まれその存在を主張する金色の玉座。そこに座る人物の前で、白恋は片膝をつき頭を垂れた。

「戻ったのね、白恋。騰蛇の守護者には会えたのかしら？」

玉座に足を組んで座り、艶やかな笑みを浮かべる女、朱音の言葉に白恋の肩が震える。

「は……い……」

「そう……けれど私は会いに行けと言った覚えはないのだけれど」

朱音の声が唐突に喉を帯びた。

「お前はあの子を殺すつもりだったのね？」

「朱音様……！　わ、私はただ、朱音様があの子が邪魔だと仰ったから……！」

「私はそんなことを頼んだ覚えはないわ」

慌てて言葉を返した白恋を遮るように、朱音の冷たい声が広間に響く。

何とか弁解しようと顔を上げた白恋の目に燃え盛る焰が映る。同時に真つ赤な焰がたちまち彼女を包み込み、広間に悲痛な叫び声が響き渡った。

「私は自分の獲物に手を出されるのは好きじゃないの。二度とこんな真似をしたら次は本気で殺すからね」

一気に上がった火柱は瞬く間に収まり、服も焼け焦げ、気を失った白恋は床に倒れ伏した。

「勾蘭こうらん、白恋を連れて行ってちょうだい」

白恋の後ろで控えていた長身の女、勾蘭が朱音の言葉に従い動く。白恋を抱いた勾蘭が去るのを待って、朱音は天陽に視線を移す。

「で、見つかったのかしら？」

「それが、どうやら鏡の力に邪魔されているらしく」

答えながら、天陽は包帯に覆われた左目を押さえる。

「そう。玄桐げんどう、そこにいるかしら」

「ここに……」

朱音の声に応え、杖をつきながら現れたのは白く長い髭をした老人。彼は天陽の横に立つと、軽く頭を下げた。

「お前の水鏡はどう見た？」

問われた玄桐は厳しい表情で首を振る。

「月読姫が剣の隠された場所へ向かっていることは確か。しかし、その場所を姫の用いる鏡で上手く我らに知られぬよう、小細工しておる様子」

「さすがは全てを跳ね返す鏡。やはりそう簡単にはいかぬか」

言葉は残念そうにも関わらず、朱音はどこか楽しげに笑った。

「陰の者等はどうしている？」

「先刻、白恋が対峙した若者。騰蛇の守護者を手中に収めたようですな」

「そう」

玄桐の言葉を微笑んで聞いている朱音に、天陽は思わず疑問を口にした。

「朱音様、彼を野放しにして良かったのですか？」

「あら、分からない？」

天陽に視線を向け、朱音は不気味な程艶やかな笑みを浮かべる。

「あの子を殺すのは、剣をあの子が手にした時。そしてその時こそ、私の長年の悲願が叶うのよ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4431u/>

---

砂時計

2011年7月15日03時35分発行